

和文讀本

稲垣千穎輯
伊之贊卜等註解
卷四

30475
教科書文庫

3
810
51-1888
0130
449323

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

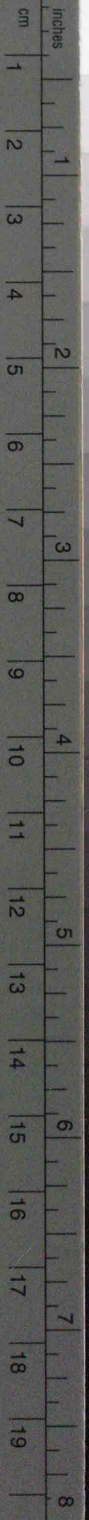


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



和文讀本卷四



稻垣千頼 輯

評論附

四時をりくの評

徒然草

ト部兼好

をるふりの移り可なるこそ物ごとくあをを
れ物のあををを秋こそもさうれと人毎よらあめ
せどそれもさる物ふて今一きハ心も浮きうのも
のハ春北けし知よあをを鳥の聲あざとこ

広島大学図書

0130449323



古今集三月
つ花たれむを
のあをか母バ
き人の袖の
かとする

祭ハ賀茂の祭
みで四月子行
る。國祭。練祭

あどまじ
世のあをき云
ハ花見小訪
み一人も散過
て後ハともぬ
よあり

六月祓ハ六月
日の大祓を

なまめか
伯父美ナレ
奥本シキフ

との外は春めきて。此どやの形る日影は垣根の
草をえ出る頃よを。や、春深く霞渡りて。花もや
うくけしきだつちどこそあを折しも雨風うら
はぐきき心あをくしく散過ぎぬ青葉もあ
ゆくまど。萬よたが心成のそどなやまは花橘ハ
名あこそねへを。ねを梅は白あぞ古の事も立歸
りこひしう思出でらる。山吹の清げも藤のお
ぶつこのなきさまあつる。をぬく思ひきて難き事
多し。灌佛の頃祭のころ。若葉の稍すくしげ小茂

りゆくちどこそ世のあをきも人のこひしきさ
あされと人の仰らましこそげあはる物あれ五
月あやぬふく頃早苗とも頃くひなのたぐくあ
ど心細うらぬうを。みあ月は頃あゆき家ハ夕
顔の白く見えて。蚊遣火ふをふるもあをきあり。
六月祓又をうし。七夕まのらあをなまめかうけ
ま。やうく夜さむおあもあど雁鳴きと来るあ
萩の下葉色づく程。早稲田うりやをあどとりのあ
つをうらるこころ。秋のそぞあをうら。又野分の朝

こそをうりしは。いひつらまは。皆源氏物語枕草
 子あど事ニテふりまは。同ト事ヲ今まは。いのを
 トイフ法あもあまを。おぼしき事ヲいそぬハ。腹アあつた
 わざあまは。筆ニテまのを。何ぢきあれたまは。び
 てあじやり捨つべき物を。人の見る。盛きあも
 あまは。さて冬枯のけしき。あを秋ハまは。さくた
 ともや。けしき。汀の草は。紅葉の散らまあり。そ
 霜いと白うかゆる。あらし。遣水より。烟のたつこ
 そをうりけしき。年朝のくまを。人毎は。急ぎあへ

るあろぞま。あくあを。まある。ま。た物あ
 て見る人も。なき月の寒けく。せめる。廿日あまう
 の空こそ。心細き。そのあれ。御佛名。荷前ノサキの使たの
 など。ぞあを。せよ。やん。ご。と。なき。公事ノジども。あま。ゆく。
 春のマウケいそぎ。おどり。のさぬ。催一行。を。る。く。さま
 ぞ。み。た。お。や。追儼ヲより。四方拜。お。は。く。あ。を。ね
 かり。ろ。り。は。暎の夜。い。た。う。ら。ま。ま。松。と。ま。と。を
 して。夜半。ま。ぐる。も。ど。人の門ヲ。く。ま。ち。く。ま。あり
 きて。何事。あ。う。あ。と。ん。お。ら。ぐ。く。の。く。く。く。足

佛名ハ十二月
 十九日より廿
 一日まで禁中
 にて行を
 荷前ハ十二月
 廿日と撰て十
 陵四墓ヲ奉幣
 使をたくらる
 公事ハ追儼
 追儼ハ十二月
 晦日の夜南殿
 の邊にて殿上
 人行ふ年中の
 疫氣を拂ひて
 春陽を迎ふる
 意あり
 四方拜ハ正月
 元日の暎ハ主
 上清涼殿の東
 階ハ天地四
 方山陵ヲ拜し
 さま儀式あり

あき人云々
月十四日十二
月晦日おの神
祭りあり

を空ヒテもあざふが。曉方より。さそが音あくなり
ぬるこそ。年のおづりも心細ヒき也。なき人のくる
夜とく。魂まのるわごを。こ北頃都ハおのりきをマナカあ
づまの方おハ。猶ほる事ゆとあま。こそあをを
なりしう。あくと明行く空のけしき。昨日ハゆうを
りたまとの見えねど。引キランニるへめづらしきあちぞ
ゆる。大路のさま。松ヲたて渡して。花やハお嬉テしげ
なるこそ。まさあをれあ也。』

水居 宣長

人のうまれつき。さぶらぶあるをのあり。物の義理。
事此利害あど。まべく萬の事を。心おあく。おき
まへあがら。口おハ得いをぬ人もあり。まを口お
かよくいへども。志の行ふお。おえせぬ人もあ
り。又口おハよくいへども。文おハ得りきし。いづぬ
人もあま。まを口おハえのをぬども。文おをよく
書出づる人もあま。あま。』

人のぬるまひ 十訓抄

不知作者

まへに人のふるまひの重らうの詞をくあひて
人をよむのふらび人をもあらざるをたをよむ好
おどねとゆりくさしふるまひを居たを心
中のあはれはよむものうあとも見えて人をもを
らむ所をよむものありかかれど是はあつら
すく思をよむ方ハあはれをたふみぐるべき所
あハをりも随ひて戯をもしをのりき事も思ら
ひ人のなまじりをもをよむ友はあはれが心あり
別

て。日りあくねをよむぬるハ徳多ありと古き
人多くよむゆらむる又人をも用意あらくて出
仕のとねあど心あくをよむよしと公事ハ
つけて失禮をもしうああるふるまひも越度
のいごきふるまひハあはれ事あり
徒然草
世々のまじりやれをよむト部兼好
手のわるき人のばぐらむら文うねあはれハよ
し見ぐるしと人よむらむるをうるま

富貴をねぐもざるをよき事とする論

世々の志ゆしや身の貧しく賤しきとせうも人ぞ

とと榮をねぐもばよるこをざるをよき事とす

世どもそハ人のまふと此情はあらず多くハ名

をむさぶる例の偽あるまふくははる心あらん

者ありともそハ世のひがりのまこそあはな

此よき事あらん此をとり形をぬぬるまひを

て向をむかぬねをらん此をとり形をぬぬるまひを

あつともむむきわづをいそしく此を名をたりの

ほり富榮えむこそ父母勳あも先祖勉あも孝行あら

ぬ身衰へ家貧しくらんトハ人なき不孝もこそ

も有りたたわのぐいさだよき名をむさぶ

るあまふふまふと此孝を忘るくもま唐土人

の常ありこの

せろまし此丙吉といひ一人のあと

本居宣長

本居宣長

わらをべの蒙求といふのとぶまよむをさけバ

童輩

とがしけと
可受ノ意

あの國北漢といひし代也。丙吉といふ大臣あり
けり。春の頃ものへゆく道に牛の人よひらきて
來るが舌を出して、甚のみどく苦しげかあ人を
見ても。今夏もあつがるか。こ北牛いつく暑々を
むこそこのくハ喘ぐなむすべし。寒さぬさこの
時よりなをぬハ天の下北をいあひあるむ事
ぞ。國北大臣ハをもと陰陽を調ふる事をむねと
まぐさつらさあるか。今わけるをわがうむふべ
きまとなり。といひけむをみよ人けおと一カかすは

あつろみ本
ハあつろむと
あつろむと
あつろむと

ありと世にいふ事ハ思ひあへりぞ。今おを
ふか。あつろむをまのました。ことあり。暑きころ
なむむとくこもあつろむを。形どりあつろむ
とあつろむ。又あつろむ。陰陽のここのひを心
みわけたふん下キハ常あつろむ。あつろむ。あつろむ
さつろむ。道りひよ。此の牛のさつろむ
見てゆくり形くさつろむをいあつろむ。
あつろむの喘ぐをみどむ。あつろむ。あつろむ。
あつろむの實ふさ思ひていへるよをあつろむ。人よ

いとこが
いとこが
いとこが
いとこが

いみじき事小思をせんとして此はくろくおとよこ
そありの心下キ得をらん
いふのひあきしをりのあるをよふいふく
る傳へたるもいとをこなり又もとよき陰陽
を調ふなごいふことあるべくも阿とぞすべし
世北中の事ハ時々の天地のあるやうも何も皆
神のみ御所為しごとく時北氣のかまひのあをぬおど
更小人のあもるあきあが小をあふぬをうること
ぐしげよひひあきいべてかの國人の形をひ

あきいりくあちたくりうるさきわらうありの

説解附

世の中北語りつたへお虚言多きおと

鈴木倫庸

げお張ときく語中およく思へばおとよりをうテ
空言形實るあり何國とやうん友三テだち集りて船遊
びきること侍りたる酒飲に連歌に謡ひ舞ふや
どお覺えを遙の沖に漕出でしお大ある魚い

ホちたしく
煩ラハシキ
仰山ナフニ用ユ

來てその船を吞らり。船の人ども驚きてあは
いみよ。俄に日よをたはぞや。いたる暗き火と
ふしてよなどいひひしるひらるよ。此魚よと
船をのぞく。海の底よいよけきば。人ども皆歸ら
ぞりぬとぞ。この事げふときくうあは魚の吞
とたる。海の底よ入りたる。いさう暗き火とも
してよなどいひしこと。誰りきくく傳へけん人
ども皆歸らむといふよとくういしをり。世よ
傳ふるをのり。此類わら。

魚を吞らり
此類わら

後の世ハむけかき物あるまじ
本居宣長

安藤爲章が千年山集といふ物ハ契沖の萬葉の
注釋をほめて。彼の顯昭仙覺がともあはきをよの
大とあは取ぞらへむ。あつてのハ驚駭をむと
いへる。まこと小さうることなり。そののみ顯
昭などの説ハらむ。そのハかの契沖が釋ハ加ふ
べきあり。あき事つとむらりとぞたむ。おむえけ
んを今も。あは縣居大人ハらむ。むを見ま。契

沖ダともどもぐらゐるもまる驚駮ヒキしどぞりあるもの
りける何事ニコシノラズもつぎくは。後の世ハ心とむけのし
き物おこをありけむ。

苗字
本居宣長

藤原源などを世に同相氏の人數もど多あるを
をそれ内を苗字ハ分カさむべし紛マれず
よつねおそれ苗字をのちよびあつてはね
たまむるナリおのけり必カナラ然ナラふべき勢イカリおして

今ハその苗字を姓シの如くなまうけむを姓ナのち
らむごとん人などハ苗字を正しく守るべきわ
ざありのしニさてこれ苗字の苗の字ハエよニあき
ことなりいをもと名字なりをの書きて
ハ名又あがあまもむる故ナおきうへたる物
あるなり名字ナとのんも當タむるおナをあナむれ
ども中昔おハ名をも又姓と名とをけむねても
廣く常は名字といひつむバ姓ナのこをけをも同
トくあつていひねりありナ「ナ」ナ今の人おの

やんホトヲク
尊上人

グ子の事をも父の事をも同苗といふにせむ本
同名ふて同姓のよしなり

みなむまび 徒然草

部兼好

みをおまびといふハ糸を結びあきねたるがみ
なといふ貝小似たるを以ふとあるやん志とを
き人ねやせとせふきあまといふハ阿やまうか

白拍子 徒然草

部兼好

多久助が申しけるハ通憲入道舞の手北中ニ興
ある事どもをそとびて磯の禪師といひける女
おをへへもあをせけり白き水干さうまきを
さうせ烏帽子をかき入をたりなむ鞘巻バ男まひと
ぞ云ひける禪師がむまめ志けりといひけるこ
の藝を伝ぐり是白拍子の根源あり佛神の本縁
をうたふ其の後源光行おかくの志とをつくを
り後鳥羽院北御作もあり龜菊小をへさせ給

ひらるナリとぞイヒタヘタリ

新いひひらるる説ハ頓巾人のうけ

むぬ事

本居宣長

大のた世の常は異なる新しき説をおとせと

あはよたあしきを説をいはず先説ひとわたりハ世中

此學者は惡もをそしらるるりのある或あるを

の分説はともあり來つる説をいなく異なるを説

きつとくハよきあしき味説ひ考ふるまなくもなく

始よりあふふるむをてりとりあけざる者もあ

り或ハ心のう向ちよハげふとあをふぬ下も多く

あるものうちさすうぬ近き人の言は従む事處

のぬくくてよしともあしともいをどたがうけ信

ぬ顔して過を類もあり或ハ嫉む心のすくめる

ハ心もハよしと思ひあがるそ此中此疵を強チ

をと免出でるをいひ説けさむと構ふる者

もあり大の舊き説をバ滅十ダ中ハ七テハハあ

き所をバ覆匿して僅ハ二三の取るべき所のお

るをとりたてて。力の限助け用んと。新説き
十も八九よくても。一ニ此わろきふとをいひた
て。ハ九のよきふとをもおしけちて。力の限ハ
我も用ゐる人おも用ゐるせと減とまる下三ふを大り
たの學者の習あり。然まとも又まぬくもハ。新を
る説のよさをきくくハ。舊きがあきこく残さ
とまで。速に改め従ふ類もなきハ非也。舊きを説
いふもぞや思ひて。かくハあまとのとやぞハ思
ひよきとも。自定三ある力あくて。疑二ちたものつらさ

てある入あいらを。新なるよき説をきくといハ。かくて
出疑そハのハのみハよくよろこびハ。忽ハま従ふたぐ
ひもありハ。』大うハ新なる説ハ。いふあハあくて
も。速にハ用ゐる人もれあるものなるハ。とハ年ハを
へても。あハのハつひハめハ。世の人此従ふをのハ
て。普く用らるるハ。その時ハ至りてハ。初ハもハ
みハ。一ハ輩も。心ハを悔ハ。思へど。おハくハ
せハ。従ハちんハも。猶ハねハくハ人ハ。とハくハあハえハ。快ハ
らハ。むハ。をハ守りて止む輩も多ハりハ。』志

の世の中此論定りて皆人の従ふ世ありてハ
初より速に改従ひはる人ハ賢く心さしく思を
せ舊き一説の拘泥はひきどろく滞敏する人を心ね
そくいふひなく思をゆるくしぞぞの」

師の説ふなづまざる事

本居宣長

たのせ古典をとくふ師の説と違へること多く
師の説のよろき事あるをむ辨へいふこと多
あるをいふあるをいふこと思ふ人ありあめ

れど。こもをもち我が師の意もて常は教らし
ハ後コトニよき考のいごきとんヨリハ必しも師
の説と違ふとてな憚りそとなん教らしコトこを
いと尊き教めてあが師のよきをせ給へるコト
なり大のた古を考ふること一人ふり
の力をて悉明らめ盡きぬくもあはれ又よき人
は説なるとんコトふ多くの中ハ誤もあはれな
るコト必あらしきと交らでハ得あはれその
ねのら心ハ今ハ古のよき悉明らありこ

世に我おきくハホカニあるもくもあつと思定めたる
あとも思の外は又人の異あるよも考もいであ
るわざありあまこの手を經るまおくさまぐの
考の上をなるよく考へきをむるかたゆつぎ
まふをしくありをてゆくはさあを師の説を
もとて必泥と守るべき下ふもあつとよきあり説
せよをせび偏ふるよ古きを守るハ學問の道ハ
ハいふやひあつとあり又おのが師をどの包
ろ知ると我のひあつとをいともあつとくも

あつとそれもいとさつと世の學者を此説ふま
といふ長くよきを説あつとあり師の説ありと
て、明あつとありなつとら、いもさつとみかくし
よさつとあつと居らんハ下たつと師をせと尊
と道をも思をさつとありモ宣長も道を尊み古を思
ひく、向あつとふる小道の明らあつとんことを思ひ
古の意此明らあつとんことをわねと思ふが故
ハ私ハ師を尊むことよりのうけも事を得し
もあへりみづつとあつとあるをなすあつとと誹ら

ん入のそりてよそせんあふなりわき小人
小誹らまはよき人小恥らむとく道をもげ古の
意をもげさくあるまごええせきあんこきす
あちあお師の心おせが却るくを師を尊む
もあるあやそいりああれ
教訓 誠 附
心を一方小むくべきと徒然草
ト 部 兼 好

ある者子を法師おなしく學問して因果の理を
もあり説經などして世わたるつ川きともせよと
いひ々せバ教のまゝ小説經師はあらんたえ子
馬小のりなりひけり興るるまをぬ身の導師
小請せらせん時馬などをわへ小あおせつらん
あをありよて落ちあんハ心うのるべしとお
をひたり次小佛事此後酒あどすあることあ
らん小法師のむげ小能なれハ檀那をさす
思ふべしとくさうあといふあを習ひなま二

の目ざやうの境小入りけきをいよしくとく
くねをえと嗜まけるやどみ説經ならふ登をひ
まなぐる年より小なる一の法師のみあもあ
せ世間の人を登る志のこゝあり若きやどハ諸
事おつけと身をたて大ある道をと成し能をも
つき學問をもせんと行末久しくあたまは事
も心よいのけねがら世をたどるの思ひてうち
あこたりのけもつさりあつり緩の目緩の前此事
のともまぎる月日を送むを成た事あ

して身ハ老いぬつひ小物の上手おあうに思
ひしやう小身をりて取返さるる一齡なまぬを
走りて坂を下る輪の如く小衰へゆく一さきハ一
生のうちまぬぬとあたまわした事の中何一何一
まうらと思ひく有第一の事を察し定め
そ此外ハ思ひ捨てし一事をとけお断し一日の
中一時の中もあまら此事の來らん中一おま
しも益のまうらん事をいとまをそそその外をバ
らちをそそ大事をいとく一あり一いれうを

もせてと心小とりてあてた。一事もなるへの
ら先たといむ碁せうの人。一手もいづれはあせ
だ。人よふぢぢぢぢぢぢ。小をたてたよつぐぢぢぢぢ。
そまふとりて。三の石をたて。十の石もはくあ
といひぢぢぢ。十をすて。十一のつくと。ハ難し
むといひありとも。あさうん方へこそつくぢぢぢぢ。
とをまてぢぢぢ。ぢぢぢぢぢぢぢぢぢ。多くあさう
ぬ石もいひあふく。是をもまて。彼をも取ら
んと思ふ心小。彼をも得て。こまをも失ふべきぢぢぢ。

里京もあむ人。急ぎく東山も用あり。まてあゆ
まつ知たりとも。西山もあきく。その益もあつるぢ
きと。我思ひ得た。ハ門より歸りて。西山へあ
くぢぢぢあり。あままで來つ。きぬぢぢ。ハの事をた
まひいひてん。日をさう。ぬ事ぢぢぢ。西山の事を
歸りて。又こそ思ひたく。めと思ふ故小。一時の懈
怠。あまをち。一生の懈怠とある。こまを恐るべし。
一事を必要さんと。思ふ。他の事。比破る。をも
いたむ。あまの。人。此嘲をも耻づ。あまの。萬事

薄
倍ニカヤ
トカフ

おのへぞしそを。一の大事あるゆゑの^不た人のお
まゝありける中ゆゑ。或者^トまを木の^{寸穂}はらき。おそ
ほの薄を^穂いふまゝあり。あまの心^渡北^邊ひ^聖し^真ま^藤こ
の事と傳へ知りたる。と語りけるを。登蓮法師其
北座小侍りたるを聞きて。雨のありけるは。蓑笠
やある^{アラハ}。給へ。この薄の事習^ヒ。渡邊のひより
の^詩より尋ねまらうんといひけるを。あやう^{三三}は物
騒^{三三}。雨^{三三}を^{三三}と人のいひ^{三三}を^{三三}むげの事
を^{三三}仰らる^{三三}物^{三三}ある人北命ハ。雨の晴間をもま

つ物^{三三}を^{三三}我^{三三}も^{三三}お^{三三}聖^{三三}も^{三三}う^{三三}せ^{三三}あ^{三三}む^{三三}。尋ねき^{三三}てん
や^{三三}し^{三三}く^{三三}。走出^{三三}で^{三三}ゆ^{三三}き^{三三}。習侍^{三三}り^{三三}お^{三三}ら^{三三}り。と申^{三三}傳
へたる^{三三}こそ^{三三}ゆ^{三三}。し^{三三}く^{三三}あり^{三三}。げ^{三三}う^{三三}。覺^{三三}ゆ^{三三}を^{三三}敏^{三三}き^{三三}と
た^{三三}ハ^{三三}則^{三三}功^{三三}あり^{三三}と^{三三}ぞ。論語^{三三}とい^{三三}ふ^{三三}ゆ^{三三}を^{三三}お^{三三}侍^{三三}る^{三三}か
る。この薄を^{三三}い^{三三}ふ^{三三}。し^{三三}く^{三三}思^{三三}ひ^{三三}ける^{三三}や^{三三}う^{三三}。小^{三三}。大事^{三三}の
因縁^{三三}を^{三三}ぞ^{三三}思^{三三}ふ^{三三}。う^{三三}ら^{三三}る^{三三}。』
頼^{三三}む^{三三}ま^{三三}ど^{三三}き^{三三}。と^{三三}徒^{三三}然^{三三}草^{三三}

ト 部 兼 好

萬の事ハたのむ^{三三}。たのむ^{三三}。の^{三三}。と^{三三}。び^{三三}。愚^{三三}。なる^{三三}。人^{三三}も^{三三}。深^{三三}。く^{三三}。物^{三三}を^{三三}

たのむゆゑも、うらみりつる事あり。以てきりひあ
りともたのむべからざ。未^強もたのむるのま何ほろぶ
財多しとてたのむるやうは、時のまも失ひやせ
し。才ありとも頼むべからず。孔子も時をわきま
徳ありとて、これむらうは、顔回も不幸あり。他
君の寵をもたのむべからず。誅をうくること速
あり。奴しこぶへりとして頼むべからず。そむきえ
しる事あり。人の志をも頼むるは、必變じ。約
をも頼むるは、信あることをとく。然し身をも

人哉もたのむべからず。是ある時ハよろび。非
なるともたのむべからず。左も右もまは障らば。前
後遠くまを塞ぐは、世をまはる。他ハひりげくご
く。心を用ゐること、まはる。さふしてまはる。地時
も、物もそのひ争ひやふる。ゆゑくして、^和まはる。あ
なる時ハ、一毛も損せぬ。人ハ天地の靈あり。天地
ハ限る所あり。人此性何ぞ^{天地}。こゝろまはる。寛大ハ
て極らざる時ハ、喜怒あれまはる。らざし。物の
ためもらぶらむ。

人をとりあつかふこと 十訓抄

不知作者

よのつねある人のていつく小心づきあく見ゆ
るハ不覺尋思慮なきを人の前尋はいづる事
ハことごとくともすまじき事ぞあり尋さうあり
て人形尋時ハとくく教へ誠めとあるべきやう
いひたもくかき取入前いざせらぬを此上入前を過面をも
僻尋ことともあはれなるハさねをひつる事入前とて云
のひなげし入前をいざせらぬを此上入前を過面をも

禮記尊客之前
不比狗

ひも教へあつて人の前入前で聲をたたくさいわ
み腹入前たつこそ人々見苦しくもべて其の日此事
もさあつてあつてを入前從者も相をへてつ
ぎ入前のべあつてあつてひとる事入前主入前わたと
らむ入前くらむ入前あらうどの前入前ハ犬を入前ぐふもい
行カ入前ふやうとこそ文入前もみえを入前まして人を
勘當入前興を入前さまさんことある入前遊入前まよ何と入前か
やう此事入前ハ汗入前あふる入前まと多入前くり一人入前ふありあ
ひて入前さる入前遊入前おどせん入前みハた入前とひ身入前ふとり

不_レ成_レ其_レ事_レ

て安_レん_レむ口を_レしき事_レあ_レは_レたりと_レも構_レへて
其_レの日_レ此_レさ_レを_レりあ_レむと_レは_レの_レり_レふ_レん_レあり
其_レ乃_レ人_レの_レあ_レま_レて_レあ_レる_レの_レ事_レは_レあ_レれ_レとい_レも
口を_レし_レき_レた_レなり_レ然_レま_レば行_レう_レぬ_レさ_レき_レより_レむ_レの
ら_レひ_レあ_レし_レの_レる_レべき_レ所_レへ_レハ_レき_レ出_レで_レぬ_レハ_レ志_レの
に_レ善_レ悪_レを_レもの_レひ_レと_レ交_レり_レ居_レる_レん_レ後_レハ_レた_レぶ_レあ
げ_レあ_レる_レぬ_レ身_レの_レい_レづ_レら_レハ_レあり_レぬ_レ程_レの_レさ_レじ_レ
ある_レべく_レバ_レ事_レ成_レさ_レま_レよ_レい_レひ_レを_レし_レて_レ戲_レあ_レる_レあ_レり
て_レた_レま_レあ_レる_レべき_レあり_レい_レを_レん_レや_レあ_レむ_レ使_レむ_レん

人_レの_レあ_レや_レし_レあ_レる_レん_レな_レめ_レ今_レは_レむ_レと_レさ_レい_レた_レむ_レこ
と_レいと_レ見_レ苦_レし_レの_レる_レん_レな_レす_レり_レか_レや_レり_レ此_レの_レ
た_レハ_レ福_レ原_レ大_レ相_レ國_レ禪_レ門_レい_レみ_レと_レの_レり_レける_レ人_レあり_レと_レ
ま_レあ_レし_レし_レあ_レる_レ事_レを_レせ_レども_レ其_レの_レ主_レ此_レ戲_レと_レ
思_レひ_レま_レあ_レる_レを_レを_レら_レむ_レが_レら_レひ_レを_レを_レり_レか
ら_レぬ_レ事_レを_レあ_レむ_レひ_レい_レの_レなる_レ過_レを_レし_レ物_レを_レう_レち_レさ
ら_レし_レあ_レさ_レま_レし_レき_レわ_レさを_レあ_レる_レも_レい_レひ_レひ_レを
し_レと_レも_レあ_レる_レき_レ聲_レを_レあ_レら_レむ_レ冬_レ寒_レき_レ頃_レハ_レ小_レ侍_レと
も_レ我_レが_レ衣_レの_レ下_レハ_レふ_レせ_レと_レつ_レと_レ免_レて_レハ_レい_レを_レり_レが

○和文讀本卷四
三

朝寢いしとまばやをらぬけいづらねをふむの
りねさせたり。召仕おも及む末の者明をとも
そまが方様の見る所ありハ人々ぞあるよしを
めくあり給ひらまば其ハいづらき面目あり心あり志
こころをきしと思ひけり。かやうのなきけりてお
まとあるたぐひ思ひつきたり。人此心を感じせ
かとは是あり。略下

楠正成兵庫下向のをり。櫻井驛にて子
正行の遺訓の詞太平記

十一歳天正本
あり十二歳と
あり

北小路玄慧等作

正成此の上をさかとも異議を申さ小及むをとも
五月十六日小都をたたく。五百餘騎あり。兵庫へ
ぞ下りけり。正成こまを最後の合戦と思ひけり
バ。嫡子正行が。今年十一歳小て供あつりけるを
思ふやうありとく。櫻井宿より河内へあへ遣
はとく。庭訓を残しけるを下バ獅子子を生まて三日
を經る時。數千丈の石壁よまをを投ぐ。其の子
獅子此機分あをむ。教へざる中より跳ね返りて

死を多しを得ぞといへり。況んや汝既に十歳
小餘りぬ一言耳小ともまらば我が教誡は違ふ
小となすの^色。今度の合戦^六天下の安否をわらふ^今
生ぬと汝が顔を見ん小と。是を限と思ふあり。正
成をぞ討死をときく。然る^バ天下の必將軍の世
小成りぬと心う^ぢ。然りと心へ^と。一旦の身
命を助らんがため小多年の忠烈を失ひて降人
み出づる小と有るべ^の。一^族若黨の一人も
死残りてあ^らん^をどハ。金剛山のほ^とり^小別籠

りて。敵寄來らむ命を養由が矢さき小懸けて。義
を紀信が忠小比^とべし。是ぞ汝が第一の孝行を
らん^と。と^なく^く申含めて。各東西へ別^せみけ
り

爲輔中納言の論

古今著聞集

橘 成 季

爲輔中納言の口傳小の^とと^とと侍るある^ハ人ハ
屏風のやうあるべきあり。屏風ハう^らむ^を一^つう^ひ
きのべ^つを^むた^ふる^くを^のあり。ひ^ごを^とりて

たつせバうふることあり人のあまりる貴
をしくありぬせバをたもて屏風のやうまひ
だあるやをせと得實うるはしきがたりあり
と侍るとのやハスイヒスル

人の上のふを誠むおきふと十訓抄

不知作者

人ハ慮あぐいふましき事を口とくいひ出し人
此短ををしりあらるまとを難しくくまらとを
おもくしし耻をましきをたらせしまらとを

てあるましたわらざらあり我ハなまとあくいひち
らしくたをひもいまらるやらふいちらる人に
をひはめくいちどやりふつく成ぬまをはのち
ざらる耻をもあらずしき身をいらずとは大事
まあからぶありあらる中の劔ハしららずたもも
ねらるぬきをれぞのし心得ぬこをあらま
小難しつせバあへりと身の不覺あらるもも
のあり大の口かろきをれ小なりぬせバを
がらあらる事補あきうせそかれ者を見せそな

どいひく人小心たのむへぞくらすく^{ナリ}くあせし
あるべし。又人のつゝむ^思おと此おのびのちもを
聞えたる小つけても。あまハな。あとうたあえ
まむハ^{コト}面目むのる登り。あつをを。あつぐのうへ
をつゝしむべし。多言止むべきあり^{コト}」

知り顔小物いふまトきいと 徒然草

卜部 兼好

何事も入りたぬ^{ハシメ}さまあつるぞよきと知人ハ。
知りうる事とく。されとありあやまをいふ。田^{サシ}

舎より出たる人小を萬の道小心得うるよりの
さし^答いしへををささ^{井ノノテモ}バ世小をづのしきうと
もあせど。あつちもいみとを思へるけしきか
たくなあり。辨へたる道小を必口あつて^{コト}問をぬ
あがりハいもぬこそいもづれ

楠正成の妻子正行小教誠此詞 太平記

北小路玄慧等作

今年十一歳小ありける帯刀。父の首此。生きたり
一時小も似ぬ有さま^下母が歎のせんあたもなげ

菊水天正本中
ハ菊作とあり

母急ぎ云々の
下異本ハ正
行腹きらんと
しつらと若黨
押へて母は告
申とあり

なるるさるるを見て流る涙を袖かたさへて持佛
堂のあさへ行きける哉母怪しく思ひてま羽を
ち妻戸のうらより行きて見せむ父が兵庫へ向
ふ時かたを留め菊水の刀を右の手は扶持
あて袴^紀腰を押しさげく自害をせんぞ志居
たりける母急ぎ走り寄りて正行が小腕は取附
まゝ涙を流して申しける^下梅檀ハ二葉あり芳
いと^下いへり汝をさなす^下父が子なすむ是程
の理も迷ふべきや^下こ^下心もよく^下事の様を思

ひて見よ^下故判官が兵庫へ向ひ一時汝を櫻
井宿より返し留めし事ハ全く迹をとむるを
ん為もあつど腹を切まると残置きしも非だ
我たとひ運命盡きて戰場も命を失ふとも^何君い
つく^處ふも御座ありと承らむ死も残り^何く^一
族若黨どもを扶持し^下かき^下今一度軍を起し御敵
を亡して君を御代もたぐまあらせよと云置
し所あり其の一言つぶさく^下さ^下く^下我も語り
し者がい^何の^時あど^間お忘るゆるぞや^下あ^下く^下てハ父

多く諫め云
々の下異本ハ
ハともあふ

ともあくもか
うべくばうさ
目を重ねて見
せんより我を
先殺せやとて
もごえこがせ
なまばさすか
正行幼少心も
もげふをと思
ひつやけのく
自害の事ハヤ
みよりうとわ
るもあ

禮三般皿

一ハ佛前ニテ
余宗ナドニハ
佛ヲ拜ム爲メ
ニ別ニ台ガコ
テハアリ故ニ其
上ヨリ泣キ落
クシテ

が名を失ひもて君の御用おあひ參らせん事お
みべいと覺えどとあくく諫めとをえと抜き
たる刀を奪ひとをむ正行腹をも切りえび禮盤
の上より泣倒せ母と共にぞ歎きける略

自滿の誠 徒然草

ト部兼好

一道おたのびさるる人あらぬ道のわしる臨
てあをせ我が道おらまじくバ言カラシあくよそお見侍
らトをのをといひ心もおをへるよと常の事

なまどよふりろくおをゆるありワカ老とぬ道のう
らやましくねむえバ所思あかうらやまワハなとあ
らもぞおけん思とひひくありあ人我が智をとを
ひと人お争ふハ角あるとの角を傾け牙あ
るをの牙を嚙出をめぐひなり人としもハ善
お布お物を物と争をざる哉徳とを他カウレンよまきとる
おとおあるを大ある失なり志お此たのさおを
も才藝のまぐせたるあとも先祖品階のほまをよそ
も人よまされりと思へる人ハたとひ詞ふいで

心をいぢぬ^レと。内心^ハを^レあぢぬ^レの^レし^ハあり。
 是を忘る^レべし。を^レあ^レ見^レ人^ハも
 いひ付^レを^レあ^レひ^レを^レ招^クる^ハた^レあ^レの^レ慢^心
 あり。一^レ道^ハも^レ誠^ハ中^ハ長^ハぬ^レ人^ハも^レ何^レの^レあ^レ
 ら^レあ^レと^レ此^ハ非^ハを^レあ^レ故^ハも^レ志^ハ常^ハも^レみ^レと^レど^レて^レ終
 り物^ハも^レあ^レこと^ハなり。
 酒の^レい^レま^レし^レ也 徒然草
 部 兼 好
 世^ハ心^ハ得^レぬ^レ人^ハの^レ多^クあり^レと^レあ^レる^レ毎^ハあ^レい。

ま^レ酒^ハを^レま^レし^レ也 志^ハひ^ハの^レま^レせ^レを^レ興^レと^レま^レし^レこ
 と^ハあ^レる^レ故^ハと^レも^レ心^ハ得^レぬ^レ飲^レむ^レ人^ハの^レ顔^ハい^レと^レた^レ人
 が^レげ^レ小^レ眉^ハを^レあ^レを^レめ^レ人^ハを^レあ^レの^レり^レと^レ捨^レて^レん^レと
 し^レお^レげ^レん^レと^レす^レる^レを^レと^レと^レ人^ハと^レ引^レと^レめ^レる^レを^レと^レる
 此^ハの^レま^レせ^レつ^レを^レま^レし^レ也 注 ^レも^レ忽^レも^レ狂^レ人^ハと^レあ
 り^レを^レま^レし^レ也 ^レ息^ハ災^ハ形^ハる^レ人^ハも^レ目^ハの^レ前^ハも^レ大^レ事
 の^レ病^者と^レ形^レり^レと^レ前^ハ後^ハも^レ志^ハも^レた^レた^レを^レあ^レと^レ祝^レふ
 ぬ^レき^レ目^ハなど^ハハ^レ淺^レま^レし^レ也 ^レ明^レくる^レ日^ハも^レで
 頭^ハい^レと^レ物^ハく^レも^レあ^レ醉^レひ^レふ^レ生^ハを^レへ^レた^レて^レる

やうみしと。昨日の事覺えば。おれやけあさくし
の大事をかたて。つぐもひと形る人をしてこのる
めを見てもよと。慈悲もあく。禮儀もよをむけり。
かく辛きめあひたるとん人。ねくく口をしと思
もぎとんや。ひとの國もこのるなまひあありと
あまもよあお人の傳へ聞きたるとん。ハあまぎお
ねおえぬおし人。北上もく見たとるごよ心うし。思
ひ入りたるとまも。心あくと見お人も思ふ所
あく笑ひたるとり。詞たあく鳥ほらあゆめと。組

もぐ。脛高くかへげと。用意あさけし。昨日來の
人とも覺えど。女ハ額髪をきとらふかきやうりま
むゆつと。顔らあさへげと。うあ笑ひ盃もてる
手あとりつと。よのらぬ人ハ看とりて口よさ
あて。みけのらも喰ひたるとまあ。聲ののちり
いごくと。あめくうたひまひ。年老いたる法師召
出されと。黒くきたあ身をあらぬまき。目もあ
てらまき。まぢりたるを興に見る人さへうと
あしくあく。あるハ又我が身いごき事と。

傍りて心ひきこせ。あまの酔あきし。下さまの
 人ハ。のりあひらさうひて。あさましくねをろし。
罵合酔
 耻がましく心うき事れを何りてをそハ。
下
 ぬ物どもおしどりく。縁より落ち馬ちるまをり
際
 おちくあやまあし。物まものぬきそハ。大路
一入
 をよろずひゆきてつひひぢ。門の下あどなむきで。
薬地
 得もいぬ事どもあたらし。年老い袈裟のけこ
嘔吐
 る法師れ。小あつちの肩をわさく。ささのぬ事
童
 どもいひつ。よろめきある。のこのちめ。か
不通過

る事をしても。此世も後の世も。益あるべきわ
チカハナホレシカ
 ざなむ。つうをせ。此の世もてハ。あやま
過失
 あやく。財をうしあひ病をまうく。百薬は長とハ
 いへど。萬の病ハ酒よりこそねられ。憂をわする
 といへど。あひたる人ど。まぎふ。うきをも思ひ
下略
 つく。泣くめる。

諫争

人を諫多ふと 十訓抄

不知作者

かゝるへも君ふちのこひ奉る忠カあらは偏カ親
 小あさのカ孝も何れを諍ふべき時あらそひ志
 しがふカ時したぐふカ忠を忠孝といふ志の志
 を主君みくもあは父母親類もてもあは知音朋
 友あてもあはあはるんとことを必いさむべ
 きコトあへども世の志をふらぬ事々をも人
 のあはひめくありひふらるる事カいさむるカ
 心づきなくしていひカ人の心はかあふやう
 にもたゆまカ天道ハあを志ともあはるカら
言 謀

ど主人の悪事といさむるものハカへり及カを蒙
 るカとあはるカしカする事カのあカしカ様カも
 なりカあカ思カひカらカるカ時カハ其カのカ人カのカようカ
 いカひカつカるカのカをカとカ思カひカ合カをカまカすカ心カのカ引
 くカつカるカつカ思カたカるカ事カのカあカるカとカきカハカむカづカの
 しくカまカいカ欠カんカだカらんカとカ此カのカ事カをカきカせ
 トカとカねカあカりカこカいカとカねカるカるカ事カあカまカど
 もカ皆カ人カのカ習カをカ腹カ黒カのカとカ又カ心カづカきカあカらカ
 ぬカあカどカもカをカあカらカむカあカりカをカあカらカむカ人カのカ腹カはカ

たむ時^三こちく制を重^三バひよくいある威ある火
みそま^三水をかけん^二その益をある^一爲^一然^二然^一をバ
機嫌をむ^一ありと和^一いさむ^一君を^一わら
う^一なりとも賢臣あひたをけ^一あ^一その國亂^一るべ^一
ら^一ぞ親^一り^一あ^一ぶ^一なりとも孝子^一は^一く^一く^一志^一
づ^一も^一其の家全^一なる^一爲^一重^一き物^一なる^一爲^一舟^一よ
のせつ^一を^一沈^一ま^一する^一が^一上下^一の^一か^一を^一せ^一
も^一ほ^一く^一よ^一つけ^一た^一め^一て^一人の^一爲^一め^一め
く^一く^一め^一め^一く^一腹^一く^一く^一の^一ある^一ま^一

き^二あり^一か^一げ^一め^一く^一い^一ま^一真^一加^一を^一思^一ふ^一爲^一故^一也^一微
子^一が^一紂^一の^一心^一を^一を^一ら^一ざる^一事^一浅^一志^一なり^一を^一が^一偽
り^一た^一を^一れて^一や^一つ^一い^一と^一あ^一ま^一何^一曹^一が^一晋^一の^一政^一を^一た^一ご
ま^一を^一諫^一め^一ぞ^一家^一を^一あ^一け^一り^一と^一志^一なり^一と^一志^一
ける^一こ^一ま^一ら^一ハ^一身^一の^一爲^一を^一い^一ま^一へ^一爲^一ら^一へ^一る^一計^一を
て^一報^一國^一に^一臣^一を^一あ^一ら^一ざる^一こと^一を^一ぞ^一志^一なり^一

後白河院法皇六波羅へ御幸の後平重
盛卿父清盛公へ諫言

源平盛衰記
不知作者或云
葉室時長卿作

三十一
ハ
バカリ

重盛卿御院ねくりは参りて六波羅へ歸り父子向
ひてさきも一院の御幸こそねを覺ゆとの
たもひ々を清盛ハおがしめし仰補る旨の聊
もあれバこそ平家追討といふこと漏れ聞ゆ
らぬトカ御幸あるとてもちとけらるべ
らぞと憤らむと重盛ハ此の事ゆめ色
と詞も出させ給ふ御うらひ保元平治あり逆
臣戮誅罰して勲功を多し今に至るまで君の
御ため不忠を存せらむと何より一門追

三十一
佛
法
僧

討の御企むるをわがやうの事は人の心つ
きてまうと聞き事小悪し物事も思出た事は
候へまのれちも叡慮小背き給え人の為事
を施さんとね不しゆさを神明三寶の御加護お
るべしと御身のねをれある御つとと
立をなれば清盛ハまの重盛ハゆきくあふ
うの者うたとぞしを

勅書

名和長年お賜なせし御書

扶桑拾葉集

後醍醐天皇

漫々たる海上に、いづくともあく漂ひて、四日を
 ありハすぎぬ。二十七日の夕に、たかや、杵築の浦
 にて、西風をげしく吹きて、いづかきあつと
 思へて、心さたぎせし、いと風よまのせし、小夜より海
 上も志のり、明けぬまは、いづこも見ゆ
 るよ、伯耆の湊、おのゑぬ、楯とりと、今ハあつと
 きぬと、いふを、いづくとも、大坂といふと、あつへ

つきぬ、あつを荒磯にて、釣舟を、まきぬ、こ
 の所、此ぬしといふのも、都におありなまを、よしあ
 し、おつけと、いふとも、いふのも、ぬし、ともある
 人一人二人、猶人も、とめおとく、出でぬ、楯と、まも
 おびやせ、まき、あやも、苦の下、只、獨り、ゆを
 継^ニ居たる、心の中、いも、ん、あ、な、ふ、い、あ、ん、と
 直衣、引つくり、ひて、今ハ、いづり、と、待居たる、舟の、こ
 と、お人一人、來り、荒々、いも、な、ま、い、あ、あ、る、よ
 下、や、い、あ、い、ま、い、忠顯を、尋ねて、御迎の、よし、を、奏

まうまういふんどもかゝるたのしさをいふる
んめふ中々其の時ハ心もあはれむも及ぶる
おとを思ひ出るたびごとく其の氣味をおね
も有り忠を致を輩いづまも疎なるべきありあ
らねども指あたりて待出でたりし心地あるた
とふおき方をなすりし
忘せぬやよるべもたのみのあはれ磯と
御舟の上ふとめし心を
長年が忠功後伏の人あはれをせんためよある

おねく也とあはれぬの君あはれこをを見せたりしもの
らばいづのがあるあなもん私の子孫まごも此の
忠ハ朽ちぬとねもへば正直を以て報國として
ゆくを急久しくはるへたえもの多へし

院宣御請文

文治五年四月廿一日院宣の御請文

東鑑

四月八日 源頼朝 卿

四月八日のみげうを同十九日可くまはりては
神赦書
 いけんつ見のうまつり候ひぬ仕まさつながこと申拜
出雲目代政綱
 上候ぬ見いので何そ奏いん候問を奏いん問おとを君君
 申あげ候てあやまち候奏をさ奏いん人人をうたへ候祈
 事ハ候べきた六い朝かた北きゆう脚久おをぬ問
 され候をんこと返六々朝あびん脚おねもひ給候問し召
 ども抄き抄の抄の抄の御遷せん宮さう遂とげ遂を候
抄いん三も三ふ三いん三お見給候申三さる事三あ三をを
 候ぬま三バ三を三あ三ら三づ三い三ら三り三候ぬ三ら三ま三を三を

故い如を沙め汰し改つ綱な目あ代ら目ぬ目り目く目さ
 いを目め目し目つ目の目ふ目ら目ぶ目き目う目の目の御定目の候目をん目と目お
 をひ給候目の目つ目ハ目き目ら目み目御大事目をと目げ目ら目を候目を
 ざ六いん六き六を六を六ら六る六わ六を六れ六ぬ六候六いま六ハ六い六で六り六
極き極み極を極は極お極ま極る極も極せ極だ極候極は極ん極よ極く極あ極お極せ極ら極
君く君め君を君を候君て君お君を君き君と君が君を候君す君し君き君お君て候君た君
舎め舎の舎り舎下舎向舎つ舎の舎う舎ま舎の舎り舎た舎る舎よ舎う舎う舎け舎給舎候舎ひ舎
仕お仕ろ仕の仕い仕き仕と仕ら仕り仕さん仕ト仕候仕ぬ仕
来を来り来ふ来し来心来な来ま来き来や来う来小来候来お来と来ま来ハ来候来し来ら来と来も来

申上^ル候もな^らぬ^にま^はる^におそ^く候かやう^に申
あげさせ給^へ候^に君^は申^あげ候^にた^らぬ人^を
もい^やし^たを^もあ^らる^にを^うと^み候^事ハ候^に
を^心ら^ず候^とも^もと^をあ^やま^の事^ハ候^まさ^し
候^へん^ハ候^に也^何事^をも^も申^あぐ^る候^まさ^し
く^心へ^ん候^にぬ^に候^にあ^らざ^し申^上候^にお^そく^に候^に
こそ^候へ^ん
將軍家御教書

建保元年五月三日和田義盛鎌倉を亂

近^邊きん^{ぎん}の^のを^のよ^こに^たす^に残^るを^めけ^しを^し
べき^{あり}わ^がれ^はあ^りん^のあ^やの^ひかり^をよ^こ
山^のを^のも^もむ^んを^おお^しと^くを^いた^て
ま^のと^もい^へと^もあ^らぬ^の事^のあ^りか^らず^の
ち^りぐ^にあ^らる^をい^とぎ^うと^うと^うと^おあ^ると
を^べい^し

消息

新大納言成親卿備前へ流させ給ふを

り小松内大臣殿より京よる源平盛衰記

内大臣より御文あり大納言あつく披き見給へ

都バ近き山里ハ置き奉らんとモテさあハこハら

へ申一のまとも死罪を宥め申をたよある小其

の事ゆめくかあハまハとハ入道あたくのこまへ

バカ及をぞ世ハ在るうひなくあがえ侍りたを

御命をのりハ申し請けぬい何くの浦おねを

とと御心安く思召をべハうてもハ昏り行くう

き世のありさまよハく思ひつゞけて念佛申し

永く悟を開くんと思召をべハ憂きハもハはハきハも

夢の世ハ中ハとハあハもハあハくハあハらハうハくハなハくハんハん

なき妻子ハ心をとハえハて晴ぬ闇路ハまハよハひハ給

ふあ我世ハあハわハらハんハほハとハハ人々の事をバをこく

み申ハべハいハなんど遊ハむハして旅ハれハ粧ハはハまハくハよハ調

へてぞ奉せらる。

新大納言成親卿備前の配所よる源左
 衛門尉信俊おつけて京ある北北方姫
 君等へ剃たる髪おそへて源平盛衰記
 返事細は遊して剃髪のおりけるを引はくみく
 是を記念うらむとあらんぜよ存生なごのくへて世は聞き
 にくらき奉るべしともおれをを今生よおそ
 相見ることの空しくともアハ後の世は思はうなう
 あど心ほそげおそきはけりたびなり
 有王が硫黄島へ渡るおつけく奈良を

二人の成親康頼俊寛あり

僧都悲しさの中も嬉しく珍しく思ひて涙
 を御拭ひぬけ給へを其の後便なきみありこ
 とありをさく御ゆくへをさうけりる便もな
 身のおりさまを知らき參らせだいふ
 のと積まども世の中さくして晴るいふ
 ちあり侍りさくも三人同ト答とく一島より
 ささるる小二人を免さるるいふ御身ひと
 り残り留ま給ふらんと人知をぬぬげきた思

召しやうをたまへ人々島へ流させ給ひて後
のゆゑの者をバ尋求めて手足を損じて責問
ふ^録あつと聞え侍りしを召使ひし者ども
遠く國々へおちりせてあまの里小一人もとま
らさきバ都小の草花ゆくりも枯れをく立紛
るる方もあくあををいしと問ふ人もあ
しきんだちも召捕へらるる^連なごきあえし
バ母御前弟我が身三人引具してかたわある便
あつたて鞍馬の奥とあやの迷ひ入り日數も見^{影カ}

えぬ山里小住も習をぬ柴のいふ忍び居て
候ひし^間朝夕の御事をの^痛歎き給へし
うちそふいとけなき身のゆくまゑいふせん
と隙あき御物思のつ^積りよ^病や病となを給ひ
たりし^二あむ弟と二人ともくいたをり慰め參ら
せし^病あともかたをばしと空しく見ぬ^病參らせ
ぬ生きての別死ふて此あられせんかゝなるを
バ二人歎き暮し泣き明し侍りしを^病とふ又弟も
抱瘡とあや申をい^病をりをして今年五月

身まがり侍り。同ト道^{一カ}と歎きし^死の^死を^死に^死お
き露の命といひな^死つと消えもや^死ら^死ざ^死ら^死ず^死と^死を^死お^死く
今ま^死さ^死ハ^死草の^死い^死なり^死お^死残り^死留^死り^死て^死侍^死せ^死ば^死う^死き^死
事も悲しき事も^死お^死ろ^死し^死め^死し^死知る^死べ^死し^死拙^死き^死果^死報^死
此^死なり^死こそ^死宿^死世の^死身^死北^死つ^死し^死め^死む^死け^死り^死く^死思^死ひ
侍^死せ^死故^死母^死御^死前^死御^死い^死く^死し^死る^死の^死時^死我^死死^死を^死ば^死誰^死を^死り
便^死と^死憑^死と^死あ^死む^死し^死ま^死さ^死べ^死き^死奈^死良^死の^死里^死を^死を^死とい^死
ふ^死人^死お^死し^死ま^死し^死尋^死ね^死行^死き^死て^死う^死お^死歎^死け^死ハ^死さ^死り^死と^死
も^死憐^死と^死給^死む^死ん^死も^死し^死ん^死と^死仰^死せ^死ら^死き^死し^死を^死承^死り^死お^死き

て當時ハ奈良の姨御前の御許お侍りあるそ^死う
那^死る^死べき^死事^死小^死ハ^死あ^死ら^死ぬ^死とも^死か^死き^死あ^死る^死住^死居^死お
し^死も^死う^死ま^死た^死お^死へ^死さ^死て^死お^死此^死北^死三^死年^死ま^死で^死い^死ら^死お^死御
心^死づ^死あ^死く^死う^死とも^死む^死と^死さ^死う^死け^死た^死ま^死を^死ら^死き^死ら^死ん
母^死御^死前^死お^死も^死弟^死お^死も^死後^死ま^死を^死憑^死む^死方^死お^死し^死誰^死お^死あ^死づ
け^死い^死ら^死お^死せ^死よ^死と^死あ^死お^死し^死め^死お^死ら^死と^死く^死し^死と^死御^死上
り^死た^死も^死く^死戀^死し^死し^死も^死こ^死ひ^死し^死ゆ^死ら^死し^死と^死を^死ゆ^死か^死し^死み
と^死せ^死の^死思^死お^死げ^死き^死水^死ぐ^死を^死お^死は^死く^死し^死が^死ら^死く^死侍^死れ^死ば
留^死め^死候^死ひ^死ぬ^死あ^死お^死か^死し^死と^死し^死と^死裏^死か^死き^死を^死し^死が^死お^死志

○和文讀本 卷四 四三

げく薄くみづきかきおぞきなりける

參河守範賴が筑紫より彼北國への

ありさまを志しきついでに乘馬望

のよしをもちひねりて返事東鑑
文治

元年正月
六日の條

源賴朝卿

十一月十四日の御文正月六日到来今日是

の脚力を立んと候つる程此の脚力到来仰

遣はる旨委しく仰げたまひ候ひ畢ぬ筑紫

の事形どら従むさらんことを思ふ事にて候へ

物騒しむをよき國を沙汰し給ふべし

構へて國の者共よき事ゆへに

馬の事まことふらむ事ゆへに

も平家の常小傾城より事あり

おのづかき道まで押取らるる事あり

聞く耳も見苦しき事ありて

ぬあり又内藤六ヶ周防の世を以て志を妨げ

候以外の事あり當時ハ國の者此心を破らぬ

やうなる事を。吉事にてあはれなれ。又八島
御座も大やけ并に二位殿女房をある。少もあ
やまり何しきもなる事なく迎へとり申させ
給ふべし。うきとふも披露せむを。二位殿を
とハ大やけを具し參らせむ。向さまあをする
事もある。んねるを帝王の御事今お始め
ぬ事ぬまども木曾ハ山の宮鳥羽此四宮を討ち
參らせむ。眞加のきをりせもき。平家まら三條高
倉宮を討ち參らせむ。がゆりよりせんとする事
明雲僧正 國慶法親王

なりさむバあり。志くを敵ををささぐ
て志づあふ沙汰せむるべきあり。内府ハきをめ
て憶病おたをせる人をむを自害などハよもせ
らむ。生どりふとて京へ具して上るべし。さ
て世の末お言ひ傳へてあをむ。いま少し吉事
あり。かへむ。此の大やけの御事おつらなき
事あり。いのあもして事あきやうもさせむ給
ふ。大勢どもふ。此の由をより。仰せ含め
らむ候ふべし。あをむ。』

侍ハ侍どもハ構へハあハろハなハどハぎハしハ
あハまハべきハようハよハくハ仰ハらハるハぞハ構ハへハてハ筑ハ紫ハの
者ハどもハもハ悪ハまハまハぬハやハうハみハふハるハまハをハ給ハふハべ
いハ坂ハ東ハのハ勢ハをハバハもハぬハとハしハくハ筑ハ紫ハのハ者ハどもハをハせ
てハハハ島ハをハむハせハめハさハせハくハ念ハなハまハきハやハうハみハ志ハがハけハのハあ
さハたハ候ハふハぞハ敵ハもハあハくハなハりハたハるハとハ人ハのハ申ハさん
みハ付ハてハ敵ハあハなハづハとハせハ給ハふハこハとハあハつハむハくハあハるハべ
あハつハむハくハ構ハてハくハ敵ハをハとハさハぬハ支ハ度ハをハしハてハよハくハ
あハつハむハくハめハくハ事ハをハ切ハらハせハ給ハふハべハなハをハ初ハくハ返ハ々ハ大

やハけハのハ御ハ事ハこハとハあハきハやハうハ小ハさハたハせハさハせハ給ハふハべ
きハありハ二月ハ十日ハのハころハふハハハ一ハ定ハ舟ハをハバハ上ハさん
むハるハあハるハ佐ハ々ハ水ハ三ハ郎ハ筑ハ紫ハへハハハくハとハとハとハさハぎハをハた
るハみハあハてハくハぐハとハ備ハ前ハのハ兒ハ島ハをハバハ責ハめハ落ハした
るハありハ構ハへハてハいハのハあハもハ物ハ騒ハしハのハとハぎハしてハ閑
はハ軍ハもハあハらハまハべハ侍ハどもハのハ事ハ是ハふハよりハがハまハよ
とハりハなハどハしてハさハくハ私ハ語ハやハきハあハどハしてハ人ハはハ見ハうハとハまハを
給ハふハぞハ又ハ路ハ々ハのハ間ハ兵ハ糧ハあハくハなハりハとハるハあ
どハ京ハよりハ方ハ々ハみハらハうハへハ申ハせハどもハさハほハどハの大ハ勢

の軍糧料にて上らざりしは、バのどろむをみな
くく有るおきと思ふあり。坂東も其の後別事
も然し。少も騒しき事候むぞ。委しくハ此の雜色
は仰せ含め候ひぬ。返々千葉介事ハ。軍はも高名
してたり。大事おせとま候ふべし。
國の者など、おののち落ちまうて來る事あり。
上豐後の舟だおとあを、やも事あり。四國を

む舟少々あはば、是よりせめよといふなり。東國
の舟ハ、二月十日のころは國をたたく上、おる
り。猶筑紫の事より、あつめ、物騒しむ。は
事おきやうみさたせとま候べし。又侍共のさや
りわ心々よてあんなる。あへて、以の外なり。實
は其の條さぞあるらん。又方々より、まを事
の訴へあひたせども、人のいもんトは全くよるべ
あはば、誠よあくだふもあつ、まを水バ、それで
よた事あり。又人いそぐとも、所詮あくあをせん

どもぞ。以の外の事にてある。又小山の者どもいづれも殊子に給ふべし。あまのしるは。是よりゆきくる者ハ。日まを思ひ。當時所知所領を志す候ふとも。さやうの論をきべき様あり。件のさまたげやめを給ふ候ふ。當時ハ。構へり。國の者をす。よき様も。らかせ給へ。筑紫の者も。四國をばせめを給ふ。此の使ハ。雜色宗光。定遠。信方。三人のつひあり。信方定遠ハ。京もあるを下せある。宗光ぞ。

國より上る。委しき事ハ。宗光が。申し。計ひて沙汰をべし。あまのしるは。御かへし。

源 範

重ねて仰る御下文。遣候ふ國の者共。不見せきを給ふべし。わうをく法師仕事。用させ給ふ。甲斐の殿原中。いさわ殿かみ殿。いとをくし申。

させ給ふべし。かぐみ太郎殿ハ、二郎殿の兄にて
おとしまし候へども、平家よつき。又木曾よつき
て、心をふぜん。みつひさし人ぬ候へば、所
知なご奉るべき。み及むぬ人にて候ふあり。さ
二郎殿をいとをしくして、是をむぐみ候ふ心
きあり。

三位中将維盛卿ハ、島よる京なる若君

姫君たちへ 源平盛衰記

旅の空よりき事もやとて、留めねむるあり。いと

もなほの心苦しむを、必むあへし。かたき
相見んば、ぬり。そしむる世もなほ者と聞あ
給む。よきをうらみ、御覽せよ。とかき給ひ
たれども、是が最後の筆のよきととも、いささ
思召せべき。只のりうを、人と聞なさんずらんと
あねくねを、悲しき。

若君姫君の御返事 平家物語

なほや今も、迎へさせ候むぬぞ。餘は御あひ
しう思參らせて候ふ。迎へさせ給へ。同

ト言葉おどかすをたると

維盛卿の息六代六波羅北囚を在處よ

り母御前の許へ 源平盛衰記

心苦しく思給ふぞたゞ今までハ何事も侍らぬ

いのしゝのたまぐも戀しくこそ思ひ奉る中よも

夜叉御前の御跡慕ひ忘を難くあを侍せ

六條攝政殿の北政所より内大臣宗盛

公の御許へ 平家物語

九郎ハまじとまき男あまを以りぬる大風大波を

六條攝政殿ハ
盛衰記ハ
平家物語ハ
あり

も嫌ひ候もて寄せ候ふらんとおおえ候ふ相構
へて御勢とも散らさせ給もてよく用心せさ
せ給へ

左少辨俊基朝臣の鎌倉小拘を逃たる

が許小京ある北北方より 太平記

俊基朝臣涙をあけ拭ひふみを見給へバ消か

る露の身比おきとあるなきおつけても以るを

暮ふりぬき世の別と承り候もんむらんと心

ぢくたく涙のやど御あしをりもなや淺く

あんど詞小餘りて思の色ふりく黒とすぐるま
でかくまたり。

元弘三年鎌倉攻の時新田義貞朝臣の

北北方より御伯父安東左衛門入道聖

秀の許へ太平記

安東涙を押へて惘然たる處に新田殿の北北臺
の御使とて薄様ふらたたる文を捧げたり何事
ぞとて披見せむ鎌倉のありさま今ハさてし
そ承り候へいのみをしむ此方へ御出候へ此の

程此式をバ身小かへくも申宥むびく候ふあど
さあぐみあつまたり是を見て安東大い色を損
とて申しくるを梅檀の林小入る者ハ染めざる
衣自香しと心へり武士の女房たる者ハけあげ
ある心を一持ちてこそ其北家をもつぎ子孫の
名残も顯せむのたまふ下

和文讀本卷四 大尾

○和文讀本卷四

五

明治二十一年五月廿三日
師範學校中學部
檢定國語教科書

明治十五年十一月十三日板權免許
同 年十二月
同 十八年八月十八日再版御届

出版 定價貳拾錢

埼玉縣士族

稻垣千穎

東京下谷區仲徒町三丁目

普及

同下谷區練堀町十四番地

奎文堂

同目本橋區吳服町六番地



編輯出版

發售



広島大学図書

0130449323

